

ハイデッガーによれば、非真理としての隠れは、プラトン以来の形而上学においては根本的に経験されていない (vgl. GA34, 93)。にも拘わらず、隠れが哲学の探求する隠れなき(真理)の本質に属する限り、隠れを経験しえない形而上学は自身の始源に対してどこまでも「無的無力」なままに留まらざるをえなく (GA34, 84)。同じことは「形而上学の基礎づけ」を企図した『存在と時間』の問題設定にも言える。なぜなら、その核となる「現存在の超越」の「暴露」のうちでは、隠れそのものは隠れてしまうからである。隠れはそもそも光のもとに来ることはできない。「哲学者の死」が隠れの根本生起と同じ場面で、それも現存在分析に即して語られたこと自体、そのことを物語っているように思われる。ハイデッガーはこうした「非-真理」の「非-」性格にいわゆる「存在の真理」を見るのだが (WIM, 193f)、それを語るにはもはや形而上学の言葉では間に合わず、ここで「形而上学の超克」が要請される (GA34, 324)。求められるのは、形而上学とは別の言葉となる。

以上、一九三〇年前後の「比喻」解釈の変容をあとづけることで、「形而上学の基礎づけ」を意図してなされた「根拠への帰還」が、形而上学自身の「没落 (zu Grunde gehen)」へと移行するさまを確認した。それはまさしく「哲学の終わり」と呼ぶにふさわしいであろう。だがこの「終わり」は思索にとつてなんら消極的なものではない。少なくともハイデッガー自身、「終わり」を「別のものに向けての終わり」(SD, 63)と見ている。「比喻」解釈を通じて展開された「真理概念の」歴史

への真正な帰還は、本来的な将来性の決定的な始源」(GA34, 10)を準備するのである。「別の始源」への問いは、すでに開かれている。

Sein zum Tode 再考

——ハイデッガー『存在と時間』と「死」の概念——

松本直樹

ハイデッガーが『存在と時間』の後半で論じる「死 (Tod)」の概念を十分に理解することはきわめて困難であるが、この発表では試みに一つの解釈を提示し、この解釈のもとではじめて『存在と時間』の後半の議論が統一的に理解できることを示したい。

ハイデッガーが死を問題にするのは人間存在の全体をその終わりに至るまで残りなく見届けるためであるが、それはたとえば、様々なことを一見、ばらばらにしている人に「要するに何をしているのか」と問うことに似ている。「終わり」に相当するドイツ語 Ende は「目的」「趣旨」という意味でもあって、「全体を終わりまで見届ける」とは、一見、ばらばらに目撃される人間存在の様々なあり方を、その全体を包括する究極的な趣旨において理解する、ということである。

とはいえ、それでは人間存在の究極的な趣旨は死であって、生とは「要するに」死であるということになるのか。ここで

第3部会

は、「死んでいる (tot sein)」状態としての死と、「死んでいく (sterben)」動作としての死を区別することが必要である。ハイデガーが「死に向かう存在 (Sein zum Tode)」と呼ぶのは後者である。というのも、生きているとは「要するに」死んでいることである、などとは言えなくても、生きているとは「要するに」死んでいくことである、とは言えるからである。

ところで、ハイデガーは『存在と時間』以外のある箇所で、人間が自らの死の可能性と本来的に対峙するためには死の可能性の現実性を堅持しなくてはならない、と述べている。これが『存在と時間』における「死への先駆 (Vorlaufen in den Tod)」という考え方に相当するわけだが、この「可能性の現実性」という一見、矛盾した言い方は、明らかに運動 (kinesis) についてのアリストテレスの有名な定義「可能的なものの、可能的なものとしての終極完成態 (entelecheia) が運動である」を念頭においている。それゆえ、死への先駆とは死の可能性が（もちろんふつうの意味で現実化するのではなく、あくまで）可能性として、いわばリアルに活性化すること、そのようにして「死んでいく」という動作、つまり運動が人間存在のうちに本来的に生起することを意味する。アリストテレスふうに言えば、「死にうるものの、死にうるものとしての終極完成態が死への先駆なのである」。

ここで大切なのは、アリストテレスによれば、運動はつねに未完了 (ateles) である、ということである。私たちは存在するかぎりには「死んでいく」のであって「死んでいる」ではなく、決して死そのものに到達することはできない。そうして、

私たちが不断にそのような不可能な可能性に直面してしまうのは、結局のところ、私たちが現にどういふわけか存在してしまっているからである、としか言いようがない。ここには、もはや無いことはでき「ない (nicht)」という不可能性が、現に私が存在してしまうということそのことを「根拠 (Grund)」として成り立っている、という事態が見出される。

この事態が、ハイデガーが『存在と時間』の後半で論じる「有責性 (Schuldigkeit)」の概念、つまり「ある『ない』ことの根拠であること (Grundsein einer Nichtigkeit)」にぴったりと重なることに注目しよう。ハイデガーは『存在と時間』の後半で、人間にその存在の有責性を告知する「良心 (Gewissen)」という現象が根源的に死と結びついて人間存在の本来性を構成する、という事態について論じているが、死と良心という、『存在と時間』の後半できわめて重要な位置を占める二つの論題がこのように統一的に理解されるのも、死への先駆というあり方そのものが、その運動としての未完了性を介して有責性という意味をもつと解されるからなのである。